マラウィの子どもたち

周防大島町立東和小学校　教頭　山本　直
（平成 17 年度派遣　アラブ首長国連邦　アブダビ日本人学校）

１．はじめに

「アフリカに行ってみたい」「あの大地に立ってみたい」

子どもの頃からの夢の一つであった。

山口県国際教育研究会でお世話になっているうちに、JICA 中国さんが実施している「教師海外研修」について教えていただいた。ぜひ行きたい！という気持ちで応募したところ、中国地区の仲間８人と一緒に参加させていただくことになった。

２．マラウィの第一印象

関西空港、香港、ヨハネスブルグ（南アフリカ共和国）と乗り継いで、マラウィの首都リロングウェイに到着した。乗り継ぎを含めて約 26 時間。あこがれのアフリカの大地に足を踏み入れた。首都なので人も多い。車も多い。とても活気ある空気を感じた。

リロングウェイの様子

バス乗り場の様子

３．マラウィについて

マラウィについて、たくさんの情報をいただいた。一部を紹介する。

- 一人当たりの GDP 299 ドル（2008 年）
  （アフリカで 47 位）
  （日本は 39,731 ドル　　世界第 17 位）
- 平均寿命　39 歳～40 歳
- HIV/AIDS　感染率　11％

病院の様子

マラウィの２大課題は「医療」「教育」ということが現地の話の中で何度も出てきた。それらを解決する一つの手段として「青年海外協力隊」の退院の活動があることも知った。

「医療」については、次のような課題があると説明があった。とにかく驚きの連続の日々だった。

- 深刻な医療設備不足、薬品不足
- 公立の病院は無料
- 「マラリア」は、要注意！

看護師さん

蚊帳は必需品

「教育」については、次のような課題があると説明があった。こちらも現地で目の当たりにして、驚きの連続であったと同時に、マラウィの人々の力強さを感じる毎日だった。

- 小学校は無償教育（義務ではない）
- 小学校卒業率は 60%
- とにかく学歴社会

地方の保育園

小学校の教室

今回の大切なミッションの一つに「マラウィの学校で授業をする」というのがあった。実際に授業をすると、とにかく一生懸命話を聞いてくれること、そして私たちにとても親切にしてくれることがとても嬉しかった。たまたま「８月６日」が授業の日だったため「平和学習」を授業に取り入れた。マラウィの先生方は「ヒロシマ」「原爆」ということは認識していた。子どもたちも一生懸命取り組んでくれた。

授業後の縄跳び

見送りも元気いっぱい！

４．帰国してからの実践

帰国してから「マラウィ学習」に取り組んだ。その中のいくつかを紹介する。

【マラウィの食べ物を作ってみよう】

マラウィの主食である「シマ」（トウモロコシの粉で作ったもの）を実際に作った。「食」は、外国を身近に感じる一つの方法であると思う。マラウィで作り方を教えてもらった「シマ」は児童にも好評だった。児童の感想の一部を紹介する。

> ※　児童の感想
> ・指で食べるのがつらかったです。
> ・シマは「もち」のにおいがしました。肉とすごく相性がよかったです。

シマ作りに挑戦

手で食べてみました

【マラウィの人に日本の食べ物を紹介しよう】

JICA 山口さんの協力もいただき、実際に山口県周辺に住んでいる「マラウィ」の人に学校に来ていただいた。児童は「日本のおむすびを紹介したい」と話し合いで決めて、一緒におむすび作りを行った。また、マラウィについての話を聞いたり、問をしたりした。児童は、あっという間に打ち解けて、とても和やかな時間になった。

ホンモノに出会うということは大切なことだとあらためて感じた。児童の感想の一部を紹介する。

児童の感想

・フローレンスさんがラップで包んでくれたのがうれしかったです。
・ライスボールホットやってみますか？と教えてあげました。
・チムウェムウェさんとマラウィで会いたいです。

おむすびを一緒にに作る

笑顔で握手

５．おわりに

2010 年の「教師海外研修」から、10 年以上時間が過ぎているが、今でも「マラウィ」というワードを聞くとすぐに反応してしまう。「マラウィ」は治安もよく、独立して一度も内戦がない国である。青年海外協力隊の隊員が世界で一番多い国と教えていただいた。

今後も「マラウィ」に注目していきたい。そして「マラウィの子どもたち」の笑顔がもっと増えるように、できることに挑戦していしていきたい。